ケース２－1（信徒版）

44 歳になるあなたは A 市内のメーカーに勤務している。先日会社から、勤続 20 周年の記念品とともに、長期休暇と特別手当をプレゼントされ、6 歳の息子、4 歳の娘、36 歳の妻と 4 人家族でグァムに旅行に行った。海外に出たのは新婚旅行以来なので、パスポートを取り直さねばならなかったが、家族にとって忘れられない思い出となった。私生活も仕事も悩みは絶えないとはいえ、他人からは「順調」に見えるのだろう。正月に親戚一同で集まったときも、去年参加した高校の同窓会でも、「お前は順風満帆な人生を送っている」と口々に言われた。じっさい家族 4 人が健康で仲良いことは当たり前ではないし、仕事においても同期では初の管理職に精進し、職務内容も自分に向いている。これ以上何を望めば良いのか、と周囲から言われるときに、「確かにそうなのかもしれない」と思う。子どもの頃に夢見た理想とは若干違うが、「幸せ」というのは案外そういうものなのかもしれない。

あなたが今の妻と出会ったのは社会人になって間もない 20 代前半に、A 市内にある A 福音教会で中高生会のスタッフを一緒にしたことがきっかけだった。東京の大学では KGK（キリスト者学生会）の活動を通して様々な背景を持つ同世代のクリスチャン大学生と交流を持っていたが、「付き合って結婚したい」と思うような女性にはついぞ出会わなかった。大学時代に一度恋愛関係になった女性はいたが、その人は同じ大学の未信者だった。その失恋によって深く傷ついたあなたは、「結婚するならば地域教会に根ざし、神に献身した女性でなければ絶対に嫌だ。」と思うようになった。今の教会で妻に会い、一緒に中高生会の奉仕をするなかで、「この人と結婚し、共に祈り、神を中心とした家族を築いていくことができたら、、、」という気持ちが高まり、プロポーズをした。妻の両親もこの教会の古くからの教会員で役員もしていたため、結婚式では妻のことを子ども同然に感じている教会員の方々が多く感涙していた。しかし実際は、この半年の間に起きたことによって、あなたと家族が深い悩みの中にあることを、同級生も会社の同僚も知らない。それは所属する A 福音教会に関わるものだった。

あなたがこの 20 年間、仕事の中での葛藤や困難に出会いつつも、神を第一に歩んで来られたのは妻のサポートのおかげであり、そして「地域教会に根ざす」という意識が妻と共有されていたからだと心から思う。もし今の教会につながっておらず、そしてもし地域教会に根ざし献身した女性と結婚していなかったら、自分の人生はどうなっていたか全く想像できないし、もしかしたら今も信仰を持っているかどうかさえも定かではないと思う。神がいて、キリストの身体たる信仰共同体としての教会があって、クリスチャンファミリーとして

の家族がある。その中に有機的に組み入れられているからこそ、あなたの仕事は充実していたし、夫婦関係も豊かにされていた。また、子どもたちの教育にとっても教会への所属は不可欠な要素だった。親のひいき目を差し引いたとしても、自分の子どもたちは健全で聡明に成長している。それは神、教会、家族の三つ組みの中で育てられたことの賜物だと、特に教会学校のスタッフ含む教会の努力に感謝している。

そんな「祝福されたクリスチャン人生」を絵に描いたようなあなたの生活が不協和音を奏で始めたのは今年に入ってからだった。3 年前に主任牧師に着任した若手の牧師のことを、あなたと妻はずっと支えてきた。同じフットサルという趣味を持つ年の近い彼とはとても馬が合い、大学時代の意外な接点もあって、同年齢の彼が神学生だったころから立場を超えた「友人」として付き合ってきた。やがて彼が伝道者となり、前任の牧師の長女と結婚し、そして副牧師として若い世代をもり立てる働きをしているのを、あなたは「自分が社会で働いているからできない働きを代わりに担ってくれている」という気持ちで応援しており、やがて彼とはダビデとヨナタンのような固い信頼関係で結ばれるようになった。4 年前にあなたが「仕事と教会活動／職業と伝道」の間で揺れ動き悩んでいた時期に、救いの手を差し伸べてくれたのも彼だった。あの葛藤をきっかけとして、「教会活動としての信仰」だけでなく、「仕事を含む人生全体を包括する信仰」について、彼とは今まで以上に深い対話が出来るようになった。「答えの出ない問題に取り組むことそのもののなかにこそ、信仰の醍醐味がある」ということに、彼の存在のおかげであなたは気づくことが出来たのだ。

しかし、3 年前に彼が主任牧師になってから、そのような友人関係が徐々に変質し始めた。というより、あなただけではなく、主任牧師になってからの彼は、誰からも心理的な距離が遠くなった。顔を合わせればニコニコしていて以前と変わらないが、その笑顔の奥に、どこか自分を守ろうと身構えているようなところがあって近づきがたい雰囲気を発するようになった。きっと主任牧師という大きなプレッシャーにさらされ、周囲が自分のことをどう評価しているのか、陰で何と言われているのかが気になって軽い神経症状態になっていたのかもしれない。あなたも 2 年前に、同期で初めて係長から課長に精進し管理職となったときに、同僚からのやっかみや陰口に晒され、一時期は疑心暗鬼となった。半年ほどは職場にいるのが針のむしろのように感じ、家を出るときに謎の腹痛に襲われ、鬱病寸前なのではないかと思ったこともあったので、大きな重責を担う立場に置かれた彼が今どんな気持ちでいるのかなんとなくは想像できる。そして彼が今教会の誰とも腹を割って話したくない理由も。あなたが辛い時期を乗り越えられたのは妻の支えと教会の人々の祈り、そして何より、4 年前の葛藤から始まった、「親友」でもある牧師との深い対話のおかげだったため、「今度は自分が彼を助ける番だ」という気持ちも強くあった。

しかし、日を追うごとに彼は防衛的になり、礼拝で語るメッセージも「基準に到達しない

キリスト者への裁き」とか「指導者や権威者に従わないことによる混乱への警鐘」といった、ちょっと「ものものしい」内容へと徐々にスライドしていった。決定的な変化があったのは、昨年の秋の臨時総会以降だった。あなたはそのとき仕事で大阪に出張中だったため、総会には出席できなかった。後から妻に内容を聞いたが、はっきりとしたことを語るのを避けているように見受けられた。後で何人かの信徒に訊いたところ、どうやらそこで行われたことは一種の「つるし上げ」のようなものであり、牧師夫人は途中体調が悪くなり退席し、牧師自身も後半は要領の得ない回答を繰り返すばかりで、きっと気持ちが動転していただろう、とのことだった。あなたは、なんとしても牧師を助けねばならないと感じたが、年末の繁忙にかまけて機を逸していた。今年に入ると、牧師はさらに強権なリーダーシップを発揮するようになり、以前あなたと語りあっていた彼の理想とは真逆に動いているように見えた。今までやってこなかったイベントを企画したり、現実的に不可能と思われるような数値目標をかかげたりして、信徒を半ば強引に教会の働きに動員しはじめた。

いったいそんなことをして誰が喜ぶのか、と正直あなたは思ったが、今の牧師は誰の言葉も耳に入らないようだった。しばらくして、なぜあのとき妻の歯切れが悪かったのか、その理由をあなたは知った。臨時総会で牧師をつるし上げた面々に、役員である妻の両親も入っていたのだった。妻の両親は典型的な団塊世代の人々で、前任の牧師の「福音をはっきりと語る説教」や「イベントや文書による伝道」、「牧会的カウンセリングによる信徒のケア」といった教会観に親しみを持っていた。現在の牧師がしている「価値観が多様化する世界における福音の切り口」、「イベントではなくて人のつながりによる伝道」、「お世話型ではなく信徒主導型でボトムアップの教会運営」といった価値観にあなたは共鳴していたが、義理の両親はそれらを全く解していない、というのは以前から察していた。しかし両親世代がそこまで追い詰められているとはあなたは考えておらず、「一言相談してくれさえいれば、、、」と後悔した。しかし主任牧師に共感しているあなたやそれより下の世代はなかなか教会内で「政治力」を発揮する機会に恵まれないし、忙しくてそもそもそんな余裕もないという人も多い。

今の自分にできることはなんだろう？とにかく主任牧師のために祈った。彼はあなたの親友でもある。取り返しの付かないことになる前に、なんとかしなければ、、、。そんなとき、妻があなたに打ち明けた話を聞き、ショックで目の前が真っ暗になった。妻の両親含む役員の総意で、牧師の解任決議をする動きが既に固まっているというのだ。教会は長老制を取っているので、人事権は長老会に相当する役員会にあった。実は、臨時総会もこの主要な役員たちの働きかけが背後にあったという。役員たちは主任牧師を解任し、協力牧師として奉仕している前任の牧師をもう一度牧師として招聘するという計画を立てているようだ。このまま行けば分裂は免れないだろう。しかし分裂というのは大げさかも知れない。主任牧師と共に教会を出て行く人がいたとしても、彼と非常に近しい数人だけだろうことは容易に予想できる。

あなたはいったい何が何だか分からなくなった。自分の人生の土台を構成していると思っていた地域教会とは、かくも脆くはかなく、人の不完全さの前に脆弱だったのか。誰に腹を立てて良いのか分からないが、会社からの帰り道に無性に怒りがわいてきて路肩の木を力の限り蹴った。妻にも怒りがわいてきた。なんで両親の考えていることをもっと早く自分に伝えてくれなかったのか。確かに仕事は忙しかったが、あと 2 年早く主任牧師と両親世代を家に招き食事会をしていたら、何か手の打ちようがあったかもしれない。ある夜、妻と結婚してから一番烈しい喧嘩をした。妻は取り乱していたが、喧嘩の後で泣きながら語った言葉はあなたの胸を打った。「神様は信じているけれど、教会は信じられない」と妻は言った。妻は表面的には笑顔を絶やさないものの、主任牧師にも役員会にも疲れ果てていた。この数年に教会で起きた出来事によって、もはや両親を含む親世代とは共にやっていけないという思いを深めていたし、なおかつ最近になって強まる主任牧師の目に見えぬ圧力を、あなたよりも何倍も繊細な妻は全身で感じ取っており、毎週日曜日に子どもたちを連れて教会に行くのは苦痛以外の何者でもなくなっていたという。教会に行くと考えると吐き気のようなものを催し、疑心暗鬼がうずまく教会の異様な雰囲気のなかで正気を保っているのがやっとだったと妻は言った。泣き崩れる妻を見ながら、このままでは妻は神と切り離されてしまう、と直観したあなたは妻に言った。「教会だけが自分たちの拠り所じゃない。もういちど、神様だけを見上げて信仰をやりなおそう。無理に今の教会に歯を食いしばって行くことだけが正解じゃない。近くには他にも教会がある。そこに行って頭を冷やすのも良いかもしれないね。」妻は泣きじゃくり、「その言葉を聞いて安心した」と言った。あなたと主任牧師の友情を知る妻は、あなたが教会に踏みとどまることを強要するに違いないと思っていたのだ。

翌週、あなたは牧師に、他教会に移ることを考えていると話した。牧師の気持ちを考えると身をえぐられるほど辛かったが、家族まで崩壊してしまうことだけは避けたかった。その週末、新人の時以来はじめて、会社の飲み会でつぶれるほど飲んだ。今は教会のことは忘れたかった。牧師に一方的に転会の意志を伝えたものの、新しい教会については何も決まっていない。「信仰の難民」となり、妻も自分も子どもたちも、もう無邪気に信仰生活を送れなくなってしまうと考えると陰鬱な気持ちになる。ここしばらくは仕事に「逃避」する生活を続けている。

設問１．この主人公の行動について、批判的に議論してください。
設問２．この主人公はこの後どう行動すべきなのか議論してください。